

古今集遠鏡と横井千秋

岩 田 隆

人 文 社 会 教 室

(1985年9月4日受理)

Kokinshū tookagami and Yokoi Chiaki

Takashi IWATA

Department of Humanities

(Received September 4, 1985)

Kokinshū Tookagami and Yokoi Chiaki

Kokinshū Tookagami, one of the many works of Motoori Norinaga (1730-1801), is his contemporary translation of *Kokinshū*, which still stands high in estimation through a history of *Kokinshū* study.

It was Yokoi Chiaki (1738-1801) that requested Norinaga to write *Tookagami* and published it for him.

This paper tries, with reference to the Norinaga's letters to Chiaki, to present a new interpretation of what passed between them during the formative process of *Tookagami*. The author believes that this attempt successfully throws a bibliographically clear light on *Tookagami*.

ま え が き

周知のごとく、本居宣長の『古今集遠鏡』は、門人の横井千秋が師の宣長に執筆を懇望して、その結果刊行を見たものである。そして、そのこと自体ほとんど何の問題も存しないように思われる。

しかし、その遠鏡について、宣長の稿本成立の時期、その稿本と板本との異同、板本に載せる千秋説の問題、その他板行に至るまでの経緯など、これまで必ずしも明確でなかったことも事実である。ところが、横井千秋宛本居宣長書簡等を子細に検討すると、上記の諸点の多くがほぼ説明せられるのである。

本稿はその報告である。

これによって、遠鏡の書誌と宣長と千秋との学問的交流の実際が、多少なりとも明らかになったとすれば、筆者の幸いこれに過ぎるものはない。

1. 宣長の古今集尊重と遠鏡の述作

まず、宣長の古今集に対する態度について、一瞥しておこう。

かれが「十七八なりしほどより、歌よまほしく思ふ心いできて」¹⁾和歌に志して以来、古今集は宣長にとって最も尊重さるべき、そして愛好した歌集であった。例え

ば、かれは日記に、「宝暦九年己卯正月元日、雨天、今日は例にまかせて、文よみはしめに、古今集よみぬ」と記している。²⁾この当時(宣長三十歳)、かれの年頭の読書始の書は古今集だったのである。なお、引き続いて宝暦十二年正月二日の条にも、「読書始、古今集序、是自先年之例也」とあり、翌宝暦十三年正月元日にも「読書始、古今序」と見えているのである。

一方、門人に対する講義でも、古今集は源氏物語や万葉集と並んで、最も重要なものの一つであった。村岡典嗣の調査を借りれば、³⁾

古今集は、前後四回講義した。第一回は、明和七年(1770)一月廿六日に始まり、明和八年(1771)十月八日に終った。式日は八日の夜で、前後一箇年十箇月に及んだ。第二回は安永三年(1774)一月廿四日に始まり、安永四年(1775)十月十四日に終る。同じく一箇年十箇月で、式日は四の夜である(即ち万葉の第一回の終了から第二回の開講の間を補充してゐる)。第三回は、安永九年(1780)二月十日に始め、天明四年(1784)閏一月十日に終へた。前後約満三箇年、式日は十の夜である。而して、第四回は、寛政四年(1792)十月八日に始まって、寛政七年(1795)五月廿六日に終った。約二箇年九箇月、式日は従前とは違って、一定しなかったらしい。

と、生涯にわたって四度の古今集全講を行っているので

ある。これらの講義は、門人たちの要望に応えるという意味もあったであろうが、宣長自身、自分の古今集研究の成果を伝えたいという気持も、強く働いていたに違いない。

このような宣長の古今集観を集約的に示すのは、『うひ山ぶみ』⁴⁾であろう。かれはこの学問論の中で、「其中にまづ古今集は、世もあがり、撰びも殊に精しければいとめでたくして、わろき歌はすくなし」と古今集を称揚し、さらに語を続けて、「此集をば、姑く後世風の始めの、めでたき歌とさだめて、明暮にこれを見て、今の京となりてよりこなたの、歌といふ物のすべてのさまを、よく心にしむべき也」と述べている。晩年に至っても、まさしく古今集は宣長にとって、「歌といふ物のすべてのさま」を十全に具えた珠玉の歌集だったのである。

この宣長の古今集研究の結実が『古今集遠鏡』六卷六冊である。

さて、本書は宣長が巻一の冒頭に、「此書は、古今集の歌どもをことごとくいまの世の俗語〔サトビゴト〕に訳〔ウツ〕せる也」⁵⁾と言うごとく、古今集の口語訳である。むろん、口語訳とは言え、宣長の豊かな学識と実作者としての鑑賞眼に裏打ちされているものだけに、古今集注釈史上に占める位置は大きい。だが、その学説の当否を論評するのはこの稿の目的ではないので、その内容的論議には立ち入らない。

ところで、この遠鏡の成立に当って、決定的な役割を演じたのが横井千秋であること、「まえがき」に述べた通りであるが、その例証を一、二挙げておこう。

宣長は遠鏡巻一の「例言」において、

かくて此事はしも、尾張の横井千秋ぬしの、はやくよりこひもとめられたるすちに、はじめよりうけひきては有ける物から、なにくれといとまなく、事しげきにうちまぎれて、えしもはたさず、あまたの年へぬるを、いかにいかにと、しばしばおどろかさるゝに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつるを、さきに神代のまさことも、此同じぬしのねぎことにこそ有しか、さのみ聞けむとやうに、しりうごつともがらも有べかンめれど、例のいと深くまめなるこゝろざしは、みゝなし山の神とはなしに、さて過すべくもあらずてなむ、⁶⁾

と書き、遠鏡の述作が全面的に千秋の要請によるものであると言っている。

一方、千秋もまた、「遠鏡序」で、

この遠鏡は、おのれはやくよりこひ聞えしまに、師のものしてあたへたまへるなり、⁷⁾

と記している。

2. 遠鏡の書誌と千秋宛宣長書簡

かくして、遠鏡が千秋の懇請によって成立したことは疑いないが、その出版に至るまでの細目についての、現時点における一般の見解を顧みておきたい。管見の及ぶところ、その最も代表的なものは、全集第三巻に載せる遠鏡についての「解題」(大久保正氏執筆)であろうと思う。そこで、以下にその主要部分を引く。

本書の成立年代は明確でないが、本居清造編「鈴屋翁略年譜補正」の寛政六年正月の条には、「古今集遠鏡既に成れり」とある。そして、同年正月十日、横井千秋に宛てた宣長の書簡に、

旧冬之御返事

一、遠鏡板下の儀、外に宜き筆者思召付御座候由、被仰聞候御趣、承知仕候、いかやうとも御もやう次第、可然やうに御取計可被下候、

とあって、この寛政六年(1794)一月十日以前、寛政五年中にはすでに成っていたことが確かめられる。

本書の「例言」の自筆草稿二種が本居家(現在松阪市所蔵)に伝えられているが、その一は「古今集遠鏡凡例稿」の名で伝わる二葉で、正月三日付本居春庵様宛の安田伝大夫の書簡、及び正月二十七日付本居春庵様宛の小西太郎兵衛の書簡の裏に片仮名書で記されている。標題も「雲のゐる遠きこずゑも」の歌も記載なく、「此書ハ古今集ノ歌トモヲコトク」云々に始まり、加除訂正の痕が著しいが、内容は他の稿本、また刊行に比して極めて簡略なものであり、全体に抹消することを示す墨線が引いてある。これに対して他の一種は、『玉あられ』の校正刷の裏面九葉を使用して平仮名書で清書されており、若干の訂正加除は見られるが、内容も、項目・文章も共にほぼ板本と同様であり、再稿であること明白である。ただし、いずれにも識語は無く、脱稿の年月は知られないが、「例言」再稿の執筆が『玉あられ』の刊行された寛政四年以後であることだけは明らかである。以上の点から本書は寛政四、五年の間に成稿したものと考えられるが、同じく本居家に伝わった本書の清書本(現在松阪市所蔵)六冊にも識語が無く(内容は刊本とはほぼ同じ)、これを確定することは困難である。⁸⁾

これは遠鏡の書誌として、穏健かつ精細な考察であって、現下における到達点を示すものと言えよう。だが、大久保氏も言うごとく、まだ不明な点も幾つか残されていることも否めない。例えば、上の文中に言う「清書本」(本居宣長記念館蔵、写本古今集遠鏡六卷六冊)の位置づけなどは、その最たるものの一つであろう。

ところが、上記の「解題」にもその一通が引かれているが、近時相次いで発見された千秋宛宣長書簡等を詳しく調査すると、遠鏡成立の過程や事情が相当な程度まで明らかになるのである。特に全集第十七巻の書簡編にも未収録の寛政五年十月五日付千秋宛宣長書簡は、遠鏡稿本の成立時期を確定する上で、決定的な意味をもつことが判明したのである。それゆえ、属目し得た当該千秋宛宣長書簡の全てを、年次順に配列して、掲げることにする。各書簡の頭に番号を付したのは、以下の記述を進めてゆく上での便宜のためである。

- 〔書簡1〕天明某年四月十七日付
- 〔書簡2〕寛政元年四月十六日付
- 〔書簡3〕寛政二年正月十二日付
- 〔書簡4〕寛政二年九月十二日付
- 〔書簡5〕寛政二年十二月廿六日付
- 〔書簡6〕寛政三年正月十五日付
- 〔書簡7〕寛政三年六月廿日付
- 〔書簡8〕寛政三年十一月四日付
- 〔書簡9〕寛政四年閏二月廿八日付
- 〔書簡10〕寛政四年三月十五日付
- 〔書簡11〕寛政四年六月五日付
- 〔書簡12〕寛政四年六月廿六日付
- 〔書簡13〕寛政四年十月三十日付
- 〔書簡14〕寛政五年正月四日付
- 〔書簡15〕寛政五年正月十四日付
- 〔書簡16〕寛政五年五月十六日付
- 〔書簡17〕寛政五年八月十一日付
- 〔新出書簡〕寛政五年十月五日付
- 〔書簡18〕寛政五年十一月十一日付
- 〔書簡19〕寛政六年正月十日付
- 〔書簡20〕寛政六年十一月九日付
- 〔書簡21〕寛政六年十二月十一日付
- 〔書簡22〕寛政七年正月廿日付
- 〔書簡23〕寛政七年某月某日
- 〔書簡24〕寛政八年七月十六日付
- 〔書簡25〕寛政八年九月某日
- 〔書簡26〕寛政八年十月十六日付
- 〔書簡27〕寛政八年十二月十八日付

なお、○印を付した十三通は、奥山宇七編『本居宣長翁書簡集』（啓文社書店、昭和八年十月十七日発行）所収のものである。

3. 遠鏡の成稿と新出書簡

上掲の書簡中、遠鏡に言及する最初のものは、寛政三年六月廿日付〔書簡7〕である。書中に言う、

一、かねかね蒙仰候古今集之義、御領掌申ながら、

殊外多用故、段々と延引仕り、今ニ得取掛り不申、甚延引之段真平御高免可被下候、其内取掛り、少々ツ、成共返上仕候様ニ可仕候、

と。これによれば、千秋は寛政三年六月よりも相当以前に、遠鏡の述作を宣長に要請していたことが分る。あるいは宣長が初めて名古屋へ出向いた寛政元年三月の折でもあったのだろうか。なお、両者が対面したのもこの時が初めてであった。ついでに言えば、上の文中の「返上」の語は、千秋が訳注を書き入れて貰うための古今集の本を、宣長に前以て届けて置いたからである。このことは、〔新出書簡〕の記事によって確かめられる。

そして、宣長が漸く実際に起稿したのは、丸一か年以上も経ってからであった。寛政四年十月三十日付〔書簡13〕に、

兼々蒙仰候古今集訳之義、取掛り段々訳し申候、夫ニ付、打聞冬ノ部迄参有之候処、其次恋雑ノ部も不残御越し被下候様ニ仕度候、夫ニ付、春ノ部へもはや相済申候へ共、又々前後見合せ考申候事有之候故春ノ部も得返上仕候、且又訳ノ義も追々出来次第入御覧申度候へ共、是又全部出来之上ニ而、前後又又考合せ候義多候故、少々ツツ得入御覧不申候、何様不遠内全部出来次第さし上可申候、

とあり、執筆に着手していることが判明する。この年の寛政四年三月、宣長は第二回目の名古屋出向を試み、十数日滞在しており、その時重ねて千秋から懇望されたことであろう。また、偶然の一致かも知れないが、前にも触れた宣長の第四回目の古今集講義が、この年十月八日に開始されている。

そして、翌寛政五年四月に宣長は上京の帰途名古屋に立寄っているが、その第三回名古屋行から松阪に帰って間もない、寛政五年五月十六日付〔書簡16〕に、

一、古今集遠鏡之儀、仰之御趣承知仕候、此節ケ様之義もいまた一向ニ得取掛り不申候、

という一節がある。ここで初めて「遠鏡」という語が出て来るのが注意せられるが、「ケ様之義」が何を意味するかは不明である。しかし、同年八月十一日付〔書簡17〕によれば、

近頃ハ春上京後、ひとと古今集訳ニ打かゝり罷在、記伝ノ下巻へも、いまだ一向ニ得取掛り不申候義ニ御座候、古今集訳清書、半分計出来仕候、大方当月中、来月上旬迄ニハ不残出来可申候間、出来次第早々入御覧可申候、左様思召可被下候、

とあり、すでに清書の段階に入り、それも半分ほど出来上っているのである。因みに、宣長が記伝三十四之巻（古事記中巻の終）の再稿本清書を終えたのは寛政五年一月廿四日であり、古事記下巻の初めに当る記伝三十五之巻に着手したのは、同年九月廿三日であり、上の文面とよ

く符合する。さらに次に紹介する〔新出書簡〕は、遠鏡成稿の事実を一層明確にするのである。

この〔新出書簡〕は、寛政五年十月五日付と推定されるもので、小塚壯太郎氏所蔵の一軸である。小塚家は本居大平門の小塚直持翁の後裔であり、同家所蔵の千秋宛宣長書簡三通の中、〔書簡20〕は『国学者伝記集成』等にも載せられてよく知られており、また〔書簡23〕も雑誌『郷土文化』⁹⁾その他に転写されている。しかし、なぜかこの新出の一通だけは紹介されることがなかった。まことに不思議と言う外はない。

たまたま一日、筆者は同家を訪問して、同家所蔵の書籍や筆跡を拝見する機に恵まれ、その折この一通に接し得たのである。読み進めてゆくと、直ぐこれが未発表のいわゆる〔新出書簡〕であることが分った。そこで、早速その場で書写させて頂いたのである。次に掲げるのがその全文である。

去、四日之貴翰早速相達、忝拝見仕候、逐日冷氣相増候節、愈御平安御座被成候条、珍重御儀奉存候愚老無事罷在候、乍憚御安念可被下候、扱宰相様御儀は言語道断奉畏入候御事、貴公様御心内遠察仕候御義ニ御座候、乍恐誠ニ夢之様成御義と奉存候、

一、玉霰論二冊、早速御返却被成下儘ニ落手仕候、

一、古今集訳之義、扱々段々と延引仕、漸清書終申候、此度入高覧申候、尤此本ハ兼々貴公様へ進上可仕と存相認申候、見苦御座候へ共、永ク御留置被下候様ニ仕度候、左様被思召可被下候、但し余り及延引申候故、一日も早く進上仕度奉存候ニ付、清書認終、其似さし上候故、いまた此方ニ扣本も得相認不申候御事ニ御座候、因茲、何とそ右之代リニ其御許様ニ而、沓部御写させ被下、其写しの方を私方へ被下候様ニ仕度、此義分而奉希候、見苦敷は御座候へ共、私自筆ノ本を進上仕度所存ニ御座候故、如斯ニ御座候、私も殊外繁用ニ而、今一本相認申候いとまも難有之候故、右之義御頼申上候、何とそ右代リ之本、早速被仰付被下候ハ、可忝候、

一、先日、植松忠兵衛兄並吉参り候ニ付、記伝十四ノ巻板下相渡し遣申候、左様思召可被下候、第三帙目も追々彫刻出来仕由、忠兵衛方より申越、扱々大慶仕候、

一、古今集遠鏡之義、早速板行被仰付候思召ニ御座候哉、右之書、兼々外へも囀仕候事故、早諸方より相尋参り、板行ハ未出来不致候哉と毎度尋越候方々有之、且又書林よりも板行願申候義ニ御座候へハ、若シ其御許様ニ而、当分板行ニ被成候思召も無御座候ハ、此方ニ而書林へ申付申度候、何分思召之程承度、いかやう共思召次第第二可仕と奉存候間、思召被仰下候様仕度候、

一、前方御預り申置候古今打聞、此度返上仕候間、御落手可被成下候、今沓部之古今集御本ハ、遠鏡代リ之本御写させ御越被下候迄、今暫拝借仕度候、ケ様ニ申上候訳ハ、此度遠鏡相著シ申候ニ付、俗訳を直ニ右ノ御本へ書入申候而、御本大ニよごれ、反古同前ニ相成申候、此義も分而御断申上候、真平御赦免可被成下候、扱右ノ御本今暫ク拝借仕置申度候ハ、此方ニ遠鏡ノ扣本無之候故ニ御座候、代リ本御写させ御越被成下候ハ、早速返上可仕奉存候、先は右等之義、得貴意度如斯御座候、尚期後信、草々、恐惶謹言、

宣長

十月五日

横井田守様

尚々、江戸表十郎左衛門様より義、追々御便御座可被為在、愈御平安ニ御務被成候哉、承知仕度候、乍憚御序之節、宜被仰進被下度奉頼上候、已上、

これによって、遠鏡成稿の時期とその宣長自筆清書本が千秋に届けられた事実が明白になったことと思う。そしてこれは、遠鏡書誌の解明にさらに新しい緒を与えてくれることになったのである。

4. 本居宣長記念館蔵古今集遠鏡

さて、上の書簡に言う、「因茲、何とそ右之代リニ其御許様ニ而、沓部御写させ被下、其写しの方を私方へ被下候様ニ仕度、此義分而奉希候」と、宣長が強く希望したと言うより、要求した清書本の写しの「扣本」はどうなったであろうか。これについて、寛政五年十一月十一日付〔書簡18〕には、

一、先便古今集訳ノ書、さし上申候処、御落手被成下、思召ニも相叶申候御趣、御細書御丁寧之御儀、私も大慶奉存候、呉々思召ニ叶申候段悦敷奉存候、尚又右扣本別ニ沓部御写させ可被下旨、御願申上候所、御承知被成下、早速御写させ可被下由、忝奉存候、

とあり、千秋が直ちに扣本の書写を命じていることが分る。そして、その扣本は程なく宣長の手元に届けられたであろうことは、想像に難くない。

ところで、本居宣長記念館には、写本の古今集遠鏡六巻六冊（以下「記念館本」と略称する）がある。大久保正氏が全集第三巻の解題で、いみじくも「清書本」とよんでいるもので、識語・署名等の一切を欠く。その書誌について、『本居宣長記念館善本目録』¹⁰⁾は、次のように記す。

古今和歌集遠鏡 写 二十巻 六冊

宣長著 袋綴 縹色表紙 二七・二×一九・〇㎝

十行 (一) 六十四丁 (二) 四十六丁 (三) 三十四丁 (四) 四十三丁 (五) 四十六丁 (六) 六十二丁 題簽「遠か、み一」「遠か、み二」「とほか、み三」「遠鏡四」「とほ鏡五」「遠か、み六」内題「古今集遠鏡」 印記「鈴屋之印」

(宣長自筆)

おおよそのような体裁である。ただし、詳しく検討すると、此写本は六冊とも到底「宣長自筆」とは認め得ないのである。なるほどこの写本の筆跡は宣長の字体にすこぶる酷似しており、一見自筆と見紛うほどである。だが筆遣いや筆勢は明らかに別人の手を思わせる。特に巻二はそれが顕著である。しかも、六冊一筆とは認め難いのである。因みに、大久保氏もまた自筆と見ることを躊躇せられた由である。¹¹⁾

そこで、ここに一つの仮説が生まれて来る。それは、この記念館本が上の書簡に言う「扣本」ではないか、という推測である。その論拠をなすものは、

- 1) 自筆と誤るほど字体が酷似しているのは、宣長自筆の「清書本」を敷き写したからではないか。
- 2) 注記・識語・見せ消し・訂正などが全くないのは、これが副本(扣本)であることの証であろう。
- 3) この写本が本居家に伝来したものであること。
- 4) 寛政九年刊行の板本遠鏡に載せる「千秋云」の説が全く見られないこと。

等の諸点である。これらの特徴は記念館本が「扣本」であることの推定を支持こそすれ、それを妨げるものは何一つないのである。従って、[新出書簡]や[書簡18]に言う「扣本」が記念館本であることの蓋然性は、すこぶる高いと言わなくてはならない。

もしこの推定が正しいとすれば、宣長が千秋に与えた「清書本」の存否が明らかではない現在、記念館本はその自筆本の忠実な写しとして、貴重な証本と言うことになるであろう。

なお、大久保氏は「解題」の中で、「内容は刊本とほぼ同じ」とされているが、すでに述べたように千秋説を全く欠く記念館本と板本とを同一視することは、やはり困難であろう。

さらに訳文等についても、宣長は板本刊行のための板下執筆の際に、相当に加筆訂正しているのである。例えば、遠鏡二の巻、よみ人しらず「白雲にはねうちかはしとぶ雁の数さへ見ゆる秋のよの月」の場合、記念館本では、

雲ヘトドクホド高イソラヲトンデイク雁ノ数マデガヨウ見エルホドサヤカナ月チヤ

と訳しているが、板本では、

サテモサヤカナ月カナ 雲ヘトドクホド高イソラヲツレダツテトンデイク雁ノ数マデガヨウ見エル

となっているのである。また同二の巻の「恋しくは見てもしのばむもみぢ葉をふきな散しそ山おろしの風」について、記念館本は訳文(異同があるが省略)の後に、

訳ノ思ヒダスハ忘レテアリシコトヲフト思ヒ出スニハアラズ、其物ノアリシ時ノ事タイロイロト思ヒツツクルヲ云ナリ、余材、打聞ともに恋しくハといへるにかなはず、

と記すが、板本ではこれを全部削除して、代りに「千秋云」の一条を載せている。これは、板本の訳文に「思ヒダス」の語を用いていないので、省略したのは当然としても、宣長の補訂の跡を示す例証とはなるであろう。

ともあれ、記念館本と板本との間には、宣長における他の著述の初稿本と再稿本という程度の相異は、やはり認めねばならぬと思う。

5. 板本遠鏡に載せる千秋説

上に見たように、遠鏡の稿本は寛政五年十月(恐らくは九月下旬)には確実に成稿していたのであるが、板本遠鏡として刊行されるまでは、なお若干の日時と曲折を経ねばならなかった。

宣長は自筆清書本を千秋のところへ送ると同時に、その出版にも言及し、千秋の意向を確かめていることが、[新出書簡]の記事によって知られる。むろん、永年その述作を待望していた千秋にとっては、願ってもないことで、直ちに承諾したことは言うまでもない。寛政五年十一月十一日付[書簡18]に、

一、古今遠鏡愈御蔵板ニ被仰付、早速御彫刻可被成旨、被仰下殊更記伝之通り、上彫ニ可被仰付由、別而大慶仕候、

とあり、千秋の意気込みのほども察せられるのである。

そして、翌寛政六年正月十日付[書簡19]では、

一、遠鏡板下の儀、外ニ宜キ筆者思召付御座候由、被仰聞候御趣、承知仕候、いかやうとも御もやう次第、可然様ニ御取計可被下候、

一、同書一二三ノ巻彫刻出来次第、先ツ右三巻を御出し可被成歟之由被仰聞、御尤ニも奉存候へ共、同じくハ全部いたし候上ニ而、御出し被成候方、可宜奉存候、

と、刊行の具体的な手筈にまで言及しており、今すぐにも出版されそうな文面である。しかし、実際の刊行は大幅に延引することになるのである。

その遅延の理由は明確ではないが、千秋の側にあったことだけは確かである。そして、その一つに千秋説の問題が介在していたことは、ほぼ間違いのないであろう。千秋説というのは、前にも触れた板本遠鏡の「千秋云」の所説のことである。

これは推測であるが、千秋は宣長の自筆本遠鏡を前にしているうちに、これをさらに完璧な古今集の注釈書に仕立て上げたいと考え始めたのではあるまいか。そこで千秋は古今集全巻にわたって、そのような自己の見解を書き記して、それを宣長の元に送った。それが、次に紹介する「入レ紙」であろうと思う。

この推測の当否は別にしても、寛政七年正月廿日付〔書簡22〕は、この間の事情を示唆するものと言えよう。

一、遠鏡二冊被遣、此度返上仕候、右二冊之内、所御考之御入レ紙一々拝見仕候、惣体此書ハ注ニ而ハ無御座、只訳を主と致し候事故、注ハ加ヘ不申、其内格別之事アレバ、たまたまハ注ノ如キ詞も加ヘ申候ヘ共、先ハ注ハ加ヘ不申候積リ也、心得ニ可成事共を加フル時ハ、殊外事長ク相成候故、先注ノ如キ事ハ加ヘ不申候、夫故此度之御入レ紙之分も多くハ略キ申候、其内ニ朱ニ而△印付申候分ハ、細書ニ御書加ヘ可被成候、右之印無之分ハ、御捨被成可然奉存候、尤細書ニト申候わけハ、此書貴公様御方ニ而御上木被成候事故、貴公様御自分ニ御書加ヘ被成候事故、細書ニト申候也、

一、右遠鏡板下ハ、二ノ巻より御認可被成由、御尤ニ奉存候、いかやう共御もやう次第可然奉存候、

一、遠鏡二付、呉々追々御考も出可申候ヘ共、惣体かやうの事ハ考ヘ候ヘハ、呉々と追々出申候物ニ而いつ迄も尽キ不申物ニて、御座候ヘハ、大体よき程ニ而、事ヲ御決し板下御認被成可然奉存候、

これによって、千秋説成立の経緯はほぼ明らかになったと思う。因みに、「千秋云」は僅かの例外を除いて、ほとんど「細書」で書かれている。なお、これについて更に重要な内容を含むのが〔書簡23〕である。年紀不明だが寛政七年と推定され、〔書簡22〕以後間もない頃のものと思われる。その全文を掲げる。

一、遠鏡へ御加ヘ被成候御考へ御入レ紙之儀、先達而も申上候通、此書ハ全体註解ニ而ハ無御座候、只俗語ノ訳ニ而御座候故、註解かましき事ハ一向加ヘ不申候、其内昔より世人ノ心得違来り候事などハ、折折書加ヘ候義、是ハ格別之事ならでハ書入不申候、此度御考之内ニも、余材抄、打聞などニ見え候事、尚又、世間ニ而も大抵皆存し候事ナトハ、皆略キ申候、少々ツ、ノ事を書加ヘ申候而ハ、際限無之候故私も申度事ハ尚山々有之候ヘ共、皆略キ申候事ニ御座候、出版致し候書ハ天下ノ人之見申候ニ御座候ヘハ色々評判いたし候事、さしてもなき業を珍しげに書加ヘ候而、返而あざけりを受候事も御座候物ニ御座候ヘハ、書加ヘ申候も大分見計ヒ有之候事ニ御座候、左様被思召可被下候、依之此方ニ而宜様作略仕候事ニ御座候、尚又御入レ紙無之事も、私了簡ニ

而、貴公様御書入レ被成候分ニいたし、書加ヘ申候義も御座候、左様思召可被下候、以上、

宣長

田守様

千秋の純粹無垢で、「いと深くまめなるこゝろざし」（遠鏡例言）をよく知っていればいるだけ、宣長は千秋の「入レ紙」の処置に苦慮したに違いない。しかし、宣長はあくまで口訳古今集としての遠鏡の基本を堅持し、一方千秋説は適宜取捨して細注とし、全体の体裁を損なわないように配慮したのであった。その結果、それには若干の宣長説を含むにせよ、相当数の千秋説を加えることになり、「千秋の『古今集』に対する造詣を見ることができる」（全集三・解題）ことになったのである。

さて、この千秋説を調査すると、

巻一 12項。 巻二 31項。 巻三 11項。

巻四 8項。 巻五 16項。 巻六 19項。

総計97項に達する。これは、須賀直見、三井高蔭の各1項、稲掛大平、田中道磨（「千秋云」に引く1項をも含む）の各2項、或人の3項に比べて、格段の数と言わねばならない。因みに、宣長の注記は、「打聞わろし」というような簡単なものが多いが、全部で278項である。

この千秋説は、独創的な見解はほとんどなく、啓蒙的補注的、解説的な色彩が濃い。しかし、その中には如何にも千秋らしい口吻を思わせるものもある。一例を引けば、二の巻の「ほにも出ぬ山田をもとふち衣いなばの露にぬれぬ日はなし」の注に、¹²⁾

千秋云、こは君たる人は、ことに深く心をとめて、味ひ給ふべき歌也、下として、貴き人の御心ばへをも知り奉り、又貴き人の、下が下の有さまをも、よくしろしめすべきは歌也、

という一文など、師説の祖述と言えればそれまでだが、尾張藩の重臣として治政に参画する立場にあった、かれの和歌観の一端がよく表れているように思う。

ともあれ、遠鏡の刊行は遅れたけれども、千秋説を取り入れることによって、遠鏡が言わば師弟の美わしき共同の書となったことを、われわれは忘れてはならないであろう。

6. 板本遠鏡刊行までの経緯

このようにして、千秋説の問題も一応の解決を見て、いよいよ板下、彫刻という段階になったが、ここに又しても思わぬ障害が起った。それは千秋の病気である。かれが何時発病したかは明らかでないが、寛政七年七月十八日付植松有信宛宣長書簡中に、

一、横井千秋主病氣、今以同様之由、気毒ニ存候事ニ御座候、何とぞ残暑中無障快氣被致候様、致度存

候、
と見ており、「今以同様」とあるから、これ以前に発病していたことが分る。病名も病状も判然としなが、経過は一進一退であつたらしい。そして、結局は享和元年七月廿四日、六十四歳で死去するまで、本復はしなかったようである。

この千秋の病気は、記伝第三帙(巻十二…巻十七)の刊行にも影響したのであるが、遠鏡の刊行をも一時頓挫させたのであった。それを証するのが、寛政七年八月七日付鈴木真実宛宣長書簡¹³⁾である。

一、遠鏡之儀、御紙面之趣委細致承知候、右ハ先達而申進候書状、千秋主へ御見せ被下候由、いか、取り被申候哉、愚老より右遠鏡板行之事催促いたし候様ニ被存候趣之書面、ケ様之儀大ニ病氣ニ障候間、当分ハ右体之事せつき呉不申候様ニと被申越候、是ハ大ニ間違ニ御座候、此方よりハ少しもせつき申候儀ニ而ハ無御座候、右遠鏡之儀も、兼々千秋主ニも殊外急キ被申候事故、此節相捨置申候も、又病氣ニ障リ可申と存シ、夫故貴君迄、先書之通申進候儀ニ御座候、此方より毛頭せつき申候心ニ而申進候ニ而ハ無御座候、此段御序ニ可然被仰達可被下候、これを讀むと、千秋の実直な下僚であつた鈴木真実の苦衷のほども察せられるが、ともかくも遠鏡の刊行は中断の止むなきに至つたのである。なお、同書簡には、

尚々、遠鏡之儀も本文ニ得貴意候趣ニ御座候間、此方ハいかやうニ而も不苦候間、千秋主病氣ニ障リ不申様、何分可然御取計可被下候、

との迫而書がある。

しかし、その後、遠鏡刊行の実務は植松有信が当ることになつたらしく、翌寛政八年六月五日付植松有信宛宣長書簡に、

一、遠鏡之儀、先書ニ申進候通、二ノ巻板下出来、早速千秋主へ遣し申候、定而御落手被下候半と奉存候、其後次ノ巻いまた参り不申、相待申候、とかく

らち明キ不申候事に御座候、

と見ており、この頃から漸く刊行の業務は進展を見せ始めたようである。これを、宣長の記録「著述書上木寛一」¹⁴⁾によって示せば、

卷二 「辰五月十一日 板下遣ス」

卷三 「辰七月五日 板下遣ス」

卷四 「辰ノ八月八日 板下遣ス」

卷五 「辰九月六日 板下遣ス」

卷六 「辰十月十七日 板下遣ス ヨコキへ」

卷一 「辰十月廿四日 はし十一丁ト卅丁ト都合四十一丁板下遣ス ウへ松へ」

卷一 「同(辰)十一月三日 三十一丁(一ノ巻)より終り迄板下遣ス」

卷五 「同(辰)十二月三日 一番校合済遣ス」

卷二 「同(辰)十一月十九日 一番校合済遣ス」

卷三 「同(辰)十二月十九日 一番校合済遣ス」

卷四 「同(辰)十二月十九日 一番校合済遣ス」

卷六 「同(辰)十二月十九日 一番校合済遣ス」

ということになる。これを裏書きするかのように、寛政八年十二月十九日付有信宛宣長書簡は、

一、遠鏡校合すり被遣、三四六と相揃候ゆゑ、即致校合返進申候、御紙面之趣入御念候御義ニ御座候、此書別而御出精被下候故、甚すみやかに致出来、いかはかりか致大悦候、殊更彫刻も宜ク相見え、返々大悦奉存候、

と、順調に進捗していることを宣長は喜んでいるのである。そして、翌寛政九年正月四日付有信宛宣長書簡において、「遠鏡一ノ巻校合摺被遣、即致校合、此度遣し申候」とあり、以下遠鏡についての細かい指示をしているが、結局はあとの事務(例えば、二番校など)は、一切を有信に任せるとする文面である。かくして、遠鏡は漸く宣長の手をはなれ、刊行をまづばかりとなつた。

そして、板本遠鏡が宣長の所に届いたのは、寛政九年五月のことであつた。「著述書上木寛一」に、かれは「遠鏡、全部已ノ五月板本来ル」と書きとどめている。だが、なぜかその本の奥付は、「木綿苑藏板」とはなつておらず、「寛政九年正月、宇恵松藏板 書林各古屋玉屋町 永樂屋東四郎」となつていた。

む す び

遠鏡の起稿から刊行に至る経緯について、ささやかな考証を試みたのであるが、一書の成るまでには複雑な事情のひそむことを、改めて痛感したことであつた。しかし、今はこの小稿がそれをどこまで正しく解明し得たか否かを、ただ恐れるばかりである。大方の批正を切望する次第である。

なお、宣長の千秋に与えた書簡の中には、優れた師としての宣長の片鱗を示す教訓や、弟子を思う真情に溢れた文言なども見られる。その師弟の情をしのぶすがとして、その一、二を紹介し、もって「むすび」に代えたいと思う。

その一つは、寛政四年六月廿六日付(書簡12)の迫而書だが、

尚々、乍序申上候、物ヲ借り申候而、返し申候ヲ返却ト申候ハ、人ノ許より我方へ返し候を受取候とて御返却被下ト書申候也、然ルを人ノ許へ返ストテ返却仕候ト書申候ハ失礼也、人ノ許へハ返上、返呈ナト書べき也、返却ハ我方へ返したる時ニ云詞也、右ハ甚以失礼憚多奉存候へ共、御心得之ため、不顧失

礼申上候、多罪々々、

と記す。千秋はよき師に恵まれたと言うべきであろう。

その二は、寛政八年十月十六日付〔書簡26〕で、この年八月十八日に妻を亡くして、悲嘆にくれていた千秋に与えたものである。

扱此度御不幸之御儀、御力落之段細々被仰聞、御尤至極之御儀、嗚と此方ニ而も奉遠察候御事ニ御座候、御詠も御見せ被下感傷仕候義ニ御座候、乍去此御別レハ無是非御事ニ而、申而もかへらぬ御事、いか程かなしき中とても、別るゝ事昔も今も、高キも賤キも、世間ニ常多き事ニ而、世中之ならひニ御座候へハ、今ハ随分御心を取直され、思召明らめ候様之御心持專一ニ奉存候、世ノ中ニかなしき同し類の多く有之候事を、あれやこれやと存候へハ、心もなくさむ物ニ而御座候、誠ニ至而かなしき事ニ当り候節ハ、我独り之やうニ存候物ニ御座候へ共、世中ハ皆左様之ならひニ而、古へ之人々の上へをも御考へ被成候而、世中之道理を存候が、和御魂〔ニギミタマ〕之徳用ニ而御座候、只勇氣のミにハ非ス、かなしき事も、たゝ何かなしにかなしく、一すちニ思ふハ荒御魂ナルヲ、能々工夫仕候而、心をとりなほし候が和御魂ニ而御座候、返す々々此上へハ、和御魂之御考へを專一ト被成、何とそ御身の御壮健成様ニ奉希候御事也、扱又かなしき不幸ニ逢候節ハ、かならず仏法ニはまりやすきならひニ御座候、是亦御考專一ニ奉存候、

この一文は、国学思想家としての宣長らしい一面がよく表れており、すこぶる示唆に富む。この懇篤な師の言を千秋は果してどのように受け取ったのであろうか。

終りに、新出書簡の披見の機会を恵まれた小塚壮太郎氏、蔵本の閲覧を許された本居宣長記念館（小泉祐次館長）、同館員木下泰典、吉田悦之の両氏、宣長書簡の調査に便宜を与えられた晒名昇氏の各位に対して、心から深謝する次第である。

注

- 1) 『玉勝間』二の巻、「おのが物まなびの有しやう」全集一、P84.
- 2) 全集十六、P145.
- 3) 村岡典嗣著『本居宣長』（増訂版）、岩波書店刊、P91.
- 4) 全集一、P25.
- 5) 全集三、P 5.
- 6) 全集三、P 5.
- 7) 全集三、P 3.
- 8) 全集三、「解題」P10.
- 9) 『郷土文化』（名古屋郷土文化会）三の一、山田秋衛

「宣長翁遺墨」。

- 10) 昭和48年3月、松阪市教育委員会発行。
- 11) 木下泰典、吉田悦之両氏談。
- 12) 全集三、P99.
- 13) 『文莫』（鈴木艮学会）第九号、鈴木淳氏「三浦益徳稿『協園叢書』所収本居宣長及び鈴木艮関係新出資料」、P59.
- 14) 全集二十、P373.